氏　　名	落合　哉人
学 位 の 種 類	博士（　言語学　）
学 位 記 番 号	博　甲　第　10082　号
学位授与年月日	令和　3　年　9　月　24　日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	「打ちことば」の基盤的研究

主　　査	筑波大学	教　授	博士（言語学）	矢澤　真人
副　　査	筑波大学	教　授	博士（言語学）	沼田　善子
副　　査	筑波大学	准教授	博士（言語学）	橋本　　修
副　　査	筑波大学	助　教	博士（言語学）	田川　拓海

論　文　の　要　旨

本論文は、携帯メール・LINE・対面会話・ネット通話の談話資料の比較・分析を通じて、いわゆる「打ちことば」の実態を分析・考察した論である。

本論文は、以下の全８章からなる。

第１章　本研究の社会的背景と学術的背景

第２章　先行研究概観

第３章　対象とするデータ

第４章　「打ちことば」の基礎的観察と言語量仮説

第５章　文から独立して現れる要素に基づく言語量仮説の検証

第６章　文に接続して現れる要素に基づく言語量仮説の検証

第７章　「打ちことば」の基盤に対する考察

第８章　おわりに

第１章では、本研究の背景となる Computer-Mediated Communication（CMC）の社会的な展開と、CMC に関する学術的言語研究の紹介がなされる。CMC はメディア・モードの特性に従って多様であり、そこで用いられる言語をひとしなみに「打ちことば」と一般化することには難があるとし、メディア・モード間での対比的な言語分析が必要であることが示される。

第２章では、CMC における言語の研究とメディア・モードの特性に関わる研究とに分けて、先行研究の紹介が行われる。日本語研究の分野では、携帯メールと LINE の言語に関する「打ちことば」の研究が行われてきたが、Computer-Mediated Discourse Analysis（CMDA）の観点から「打ちことば」を再検討する必要があることが示される。本論文では、メディア・モードの特性のうち、特に機能的な側面に注目して、対面会話や音声通話、携帯メール、LINE などの談話資料を対比的に分析することにより、「打ちことば」の位置づけを試みることが示される。

第３章では、まず、機能的な側面に注目して、携帯メール・LINE・対面会話・ネット通話の４つのメディア・モードの共通点・相違点が整理される。その上で、対面会話・ネット通話等の音声データの取り扱いや、量的分析における方針の異なるトランスクリプトの処理など、対象とする談話資料とその扱い方について、説

明が行われる。

第 4 章では、4 つのメディア・モードそれぞれの談話資料について、質的・量的な調査・分析が行われる。質的な観点から、LINE の発信の現れ方を観察すると「発信の単位」「役割の単位」「話題の単位」という 3 つの分析単位が想定できることが示される。量的な観点から、4 つのメディア・モードにおける 1 ターンの平均文字数に違いがあること、感動詞や終助詞、接続詞・接続助詞など命題に直接関与しない要素は簡潔な言語表現を志向する際には省略されやすいことが指摘され、ここから、メディア・モードの特性とこれらの要素の出現量とが対応するという「言語量仮説」が想定できることが述べられる。

第 5 章では、具体的に「言語量仮説」から、接続詞と感動詞の出現のあり方についての分析が行われる。その結果、①各メディア・モードにおいて、接続詞・感動詞の出現頻度は、1 ターンの平均文字数と必ずしも対応しておらず、携帯メール・LINE は、対面会話・ネット通話よりも著しく出現が少ないこと、②個々の接続詞・感動詞の量から相関分析を行うと、携帯メール・LINE で共通した傾向が見られ、対面会話やネット通話、書きことばとも独立したものであること、③携帯メールと LINE は、対面会話・ネット通話と比べて、述べた内容に自分で情報を付け足す「自己完結的な発話展開」が生じやすく、メディア・モードの特性と関わる特徴の一端を形成していること等が指摘される。

第 6 章では、第 5 章と同様に、「言語量仮説」から、接続助詞と終助詞の出現のあり方についての分析が行われる。その結果、①接続助詞・終助詞の出現頻度は、各メディア・モードの 1 ターンの平均文字数と対応していること、②個々の接続助詞・終助詞の量から相関分析を行うと、書きことばとは独立して、4 つのメディア・モード共通の傾向を見いだすことができること、③メディア・モードごとに出現傾向の異なる一部の語があるが、この出現状況は「自己完結的な発話展開」の観点から説明できること、④言語規範的特徴に関しては、携帯メール・LINE には、対面会話・ネット通話とはやや異なった傾向が見られること等が指摘される。

第 7 章では、第 4 章から第 6 章までの分析・考察を踏まえて、「打ちことば」の基盤的特徴に関する総合的な検討が行われる。4 つのメディア・モードは、書きことばと対立する共通性が見られること、携帯メールと LINE に対面会話やネット通話とは異なった傾向が見られるが、おおむね話しことばの延長にあるものと見なせること、携帯メール・LINE における文体的特徴は話しことばの特徴に対応し、言語規範的特徴は書きことばの特徴に対応することなどが示される。さらに、本論文で採用した方法は、個別のメディア・モードの分析にとどまらず、コミュニケーション一般の研究を進める上でも有効であることが示唆される。

第 8 章では、第 1 章から第 7 章までをとりまとめて示した上で、本研究の意義と今後の課題が示される。

審　査　の　要　旨

1　批評

新たなコミュニケーションの媒介となるコンピューターやスマートフォンなどの機器類、そこで提供される携帯メールや SNS などのサービス（著者はまとめて「メディア・モード」と呼ぶ）では、その特性に従って、日本語学で一般的な対象とされてきた書きことばや話しことばとは異なる「打ちことば」が用いられるとされてきた。しかし、CMC で用いられることばに書きことばや話しことばとは異なった様相が見られるとしても、CMC の多様な言語のあり方を「打ちことば」として一般化して良いのかについては疑念が残されていた。特に、「打ちことば」と話しことば・書きことば、さらには「打ちことば」内部の多様な言語運用を、通貫して測定する客観的規準がなければ、「打ちことば」は、新しい言語運用に対する印象的・便宜的な名称の域にとどまり、言語学的なカテゴリーとして確立できない。従来の CMC に関わる言語研究では、これらの課題を十分に解決することができないでいた。

著者は、命題から離れた言語要素の出現頻度はメディア・モードによって異なった傾向性を示すという「言語量仮説」による分析を提案することにより、「打ちことば」と書きことば、話しことばの位置づけに成功するとともに、「打ちことば」内でも傾向差が見られることも明らかにした。「言語量仮説」は、言語の基本的な性質に基づくものであり、「打ちことば」の分析に止まらず、多様な言語運用のあり方を分析するのに応用できる。本論文の分析対象は、携帯メールや LINE などのモードにより産出された、時間限定的かつモード特性の影響を受けた言語資料である。著者が「言語量仮説」という方法を提示したことで、「打ちことば」の研究は、過渡的な時代に生み出された一時的現象を記録するものから、メディア・モードと言語の関係を考察する領域へと導かれたと言って良い。

本論文が CMC、CMDA に関わる国内外の先行研究を丁寧に読みすすめ、批判検討を加えている点も評価したい。CMC に関わる言語研究だけでなく、メディア・モードの機能に関わる研究や CMC に関わる社会学的研究など、広い視野から先行研究を捉え、整理している。本論文の第 1 章と第 2 章は、現時点で CMC 研究に関する最適な導入となっている。

こうした分野・領域を越えた視野に立ちつつ、本論文では、データに基づいた極めて着実な言語分析の手法が採用されている。検証可能性を十分に配慮して言語資料が選定され、妥当な手法で分析が行われている。一部、大量の言語データが未だ集積されていないため、著者が個人で収集せざるを得なかったものもあるが、それらに対する分析も、統計的な検証に耐えられるものとなっている。

一方で、本論文が日本語学における「打ちことば」研究を継承して題目から「打ちことば」という用語を用いることは、CMC 研究にとってキーボードを打つ所作と関連付けられた不必要な縛りをもたらすことも予想される。従来の「打ちことば」研究を「メディア・モードと言語との関係論」の領域へと導こうとするなら用語や定義の再考も求められる。

しかしながら、このことによって、本論文が日本語研究の新たな進展の可能性を開く極めて重要な研究として高く評価される点が揺らぐことはいささかもない。本論文の今後の発展が大いに期待される。

２　最終試験

令和 3 年 7 月 16 日、人文社会科学研究科学位論文審査会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

３　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。